古い和紙に関する考察

第4報 京都大徳寺三玄院保蔵古文書とその用紙

加 藤 晴 治

On Study of Handmade Paper in Old Age

Haruji Kato

On analysis of old handmade paper which has been made in the centuries between 15th and 18th, I made an investigation on the subject of vicissitude in the progress of paper manufacture.

The development of working technique of paper manufacture was tolerably notable in 1550 especially on medium and their paper and then it was improved step by step. Most excellent paper appeared on Keicho and Genbun era (1600~1750).

A fatal defect of the technique on old paper manufacture is a beating process for raw material and it's the cause of the blemish of the paper on which surface still remains a raw fibre. Moreover, there are no standardized size for breadth and thickness of the paper.

大徳寺の塔頭、三玄院に保蔵されている和紙に書かれてある古文書は、享徳（1452）より天明（1788）に至る長い間に亘るものの数々である。してみると、享徳元年よりはじまって、文正、文明、延徳、文亀、永正、大永、天文、弘治、永禄、元亀、天正、文禄、慶長、寛永、正保、寛文、享保、寛保、元文、明和、天明の22世、337年のものであって、これらの文書の用紙を見ることによって、およそこの間における、和紙製造の技術的変遷をながめることができる。

今これら年代に製造されたと推定される和紙を考察した結果を表示すれば表のごとくであって、そのいずれもが一般町民の間に用いられたものである。

大徳寺保蔵用紙の考察とその意義

古い和紙の観察とくに、大徳寺三玄院における和紙考察についての特別な意義は次の2つに要約することができる。

(1) この用紙は1452年から1788年にいたる間において、作られたものと推定されるべきものであって、その当初は、室町時代すなわち戦国の時代であって、武技にいいそがしい時代であり、文物などに関する関心はすくなく、したがって和紙産業のごときは、もっとも、おろそかに取扱われた時代であった。それに続いた安土、桃山時代は、天下統一に傾き、世の平和とともに、平和産業への関心が深められ、つづいて江戸時代にい

たって鎖国と開国との国策を経過して近代文化の基礎をつくり、ここに和紙産業も著しい進展を示したのである。1788年は、いわゆる後期江戸時代でいよいよ町民文化の時代に入ったのであって、紙の需要もとみに増大したのである。

(2) 第2の特長は、保蔵用紙の大部分が、民間において使用された用紙であったということである。渡来当時における和紙の用途はいうまでもなく、写経用が主であった。平安時代においては、貴族文化であって、主として貴族という特別階級人の独占的用途であり、それに加えて官庁用紙といった方面への用途が主であった。宗教方面にしろ、官公庁用紙または、貴族用紙にしろ、いずれも特殊なものであって、一般町民用紙とは異なったものであった。換言すれば、特殊用途紙の製造は、紙産業においても特殊なものであった。経済品というよりは、むしろ特殊品であった。しかし一般町民用紙となれば、経済品の取扱いをうけるべきものであり、ここに紙産業としての意義が生まれているのである。すなわち三玄院保蔵文書の用紙は、当時の一般町民用紙製造の紙産業を推論する資料として適当なものであって、特殊なものではないのである。

この二大特長を骨子として三玄院保蔵古文書用紙を考察することに大きな意義が存するのである。

番号	年 代	大 き さ (cm)		厚 さ (mm/100)		考 察
		タテ	ヨコ	最厚	最薄	
1	享徳元年 (1452)	—	—	29	24	厚手の楮紙, 厚薄の差大, 褐色化している, 虫害多し, 剛度小繊維束多し, 簀目, 糸目, 目立たず(紗すぎ)
2	元正元年 (1466)	30	×43	33	21	厚手の楮紙, 厚薄の差大, 繊維束多し, 虫害多し, 淡褐色に変色す。
3	文明12年 (1480)	28	×45	17	14	厚薄の差少ない, 楮紙, やわらかく, 剛度の小さい紙, 白色から褐色に変色している, 繊維束少なく, 虫害も少ない。簀目は横の方向にかなり見えている, 竹目は殆んどみえない。
4	延徳3年 (1491)	28	×40.2	—	—	厚手の楮紙, 黄変している, 虫害多し。
5	文亀元年 (1501)	32	×40	30	28	厚手の楮紙, 褐色化している, 虫害多し。
6	永正6年 (1509)	29.4	×45	—	—	簀目, 糸目おり, 虫害多し。
7	永正13年 (1516)	31	×38	20	17	繊維束あり, 虫害多し, 剛度大, やや黄色化している。
8	永正14年 (1517)	—	—	18	16	薄手, やや黄変す, 虫害少しあり, 剛度小, 叩解程度適当。
9	永正15年 (1518)	28.5	×42.5	21	19	やや黄変す, 剛度大, 繊維束あり, 虫害あり(小孔に害されている)
10	永正16年 (1519)	27	×39	34	29	厚手の楮紙, 剛度大, 繊維束多し, やや黄変し部分的に褐色化している。虫害あり,
11	大永6年 (1526)	31.8	×45	—	—	31.8cm を2つに折って, 半分に文字をかけたもの。厚手の楮紙, 黄変している。手紙である。
12	天文16年 (1547)	—	—	15	14	中葉の厚さの紙。厚薄の差の少ない良紙。虫害少しあり, 簀目, 糸目, 目立たない, 白色がやや褐色化している。かなり精巧な良紙である。奈行宗山が綱首座禪師にあてたもので, 奉行はよい紙を使っている, 文字も丁寧にかつ上手に書かれてある。
13	天文7年 (1538)	27	×36	34	24	黄変している, 虫害多し, 繊維束多し, 厚薄の差もかなり大きい。
14	天文22年 (1553)	27.5	×40	32	20	この大きさの紙が, 原紙漉上げのままの耳付きの大きさである。当時1枚ずきの大きさである。黄変している, 虫害多し, 繊維束多し, 厚薄の差大。楮の強力紙であって, 今日の“はとめ紙”のような外観をしている。一般的に, この時代のものの代表紙といえよう。
15	天文21年 (1552)	25	×40	16.2	13	厚薄の差大, 虫害中位, 剛度小, 色は比較的白い, 簀目, 糸目, 目立つ。
16	弘治元年 (1555)	28	×40	34	30	厚薄の差大, やや黄色化す, 虫害多し, 繊維束多し, 簀目, 糸目, 見え, 耳付きのままの大きさである。当時の1枚漉の基準判である。
17	弘治2年 (1556)	30	×45	24	21	中手の楮紙, 虫害中位, やや黄褐色化している, 厚薄の差少し。
18	弘治3年 (1557)	28	×40	34	30	弘治元年判と同様である。第14, 16, この2枚は弘治年間における, 厚葉和紙の代表的のもので大きさおよび紙質もそうである。その特長は厚手で極めて強いことで, 14番と同じように, 今日の“はとめ紙”に相当するものである。この耳付紙からみて, 漉紙の際の天地の区別がよく判る。しかし, これを利用して文字を書く人は, 天地の区別はしていないようである。
19	永禄元年 (1558)	26.5	×40	27	24	やや黄変している, 繊維束少し, 叩解適度, 虫害多し, 簀目, 糸目, 目立たず。
20	永禄4年 (1561)	27	×39	30	25	同 上。
21	永禄5年 (1562)	28	×40	26	22	同上, 剛度大, 叩解やや少し。
22	永禄10年 (1567)	28	×40	32	30	17番と同じ。
23	永禄10年 (1567)	29	×43	14	12.5	薄葉, 虫害多し, 繊維束多く, 雲龍紙のごとく見ゆ。
24	永禄11年 (1568)	28	×40	30	25	18番と同じ。
25	永禄12年 (1569)	28	×41	18	16	やや黄変している, 剛度大。 永禄年代の紙には, 厚葉, 中葉, 薄葉の3種がある。中葉または薄葉に属するものに精巧なものが多い。虫害は薄葉に多く, 厚葉には少ない。

番号	年 代	大 さ き (cm)	厚 さ (mm/100)	考 案
		タテ ヨコ	最厚 最薄	
26	元亀元年 (1571)	25.4×39.5	— —	厚葉, 川晒程度の白色紙, 虫害あり, 簀目, 糸目, 明らか。
27	天正元年 (1573)	33 ×45	18	中葉の厚さ, 繊維束ほとんどなし, 簀目, 糸目あり, 虫害多し。
28	天正 4 年 (1576)	28 ×41	7.5 6	薄手の雁皮紙, 虫害殆どなし, 白色なるもやや黄変す。簀目, 糸目あるも, 精巧な紙である。
29	天正 4 年 (1576)	27 ×41.5	12 11	薄葉虫害多きも精巧な紙である。薄葉の代表的のものである。天正時代になって, 製紙技術がかなり進んできていることがわかる。
30	天正 5 年 (1577)	37 ×39	30 24	厚葉, やや黄変している。簀目, 糸目, 目立たず, 剛度大, 虫害多し。この大きさは, 漉上げ 1 枚の大きさと耳付きのままのものである。この時代の 1 枚漉の代表的のものよりやや小さい。
31	天正 6 年 (1578)	28 ×40	10 8.5	薄葉, 繊維束多し, 虫害大, やや黄変す, 簀目, 糸目よく目立つ。
32	天正 7 年 (1579)	— —	16 14	中葉紙でやや黄変している, 虫害多し, 剛度の大きい楮紙である。
33	天正10年 (1582)	26.5×40	15 14.5	中葉やや黄変す, 簀目, 糸目あり, 虫害多し。
34	天正11年 (1583)	28 ×40	20 21	虫害多し, 黄変す, 剛度大, 耳付きのままの大きさで, これは, 漉上げ 1 枚の大きさになる。
35	天正10年 (1582)	28 ×40	36 26	厚葉紙, 厚薄の差大, 繊維束あり, 叩解不足, 剛度大, 虫害多し, やや黄変す。
36	天正13年 (1585)	30.5×45.5	24.5 24	厚手の楮紙, 虫害多し, 白色度高し, 簀目, 糸目ともに目立つ。
37	天正15年 (1587)	24.5×38.6	— —	糸目のかんかくが 3cm になっている。虫害多し, 道瓜の書き置きで利久にあてたものである, 色は白で変化していない。
38	天正17年 (1589)	29.2×42	— —	白色度は川晒程度, 虫害多し, 簀目目立つ。
39	天正19年 (1591)	29 ×45	24.5 20	厚手の楮紙, 白色, 虫害多し, 小円形の虫喰穴が全面にあいている。繊維束多し, 簀目がよく目立つ。
40	文禄 3 年 (1594)	28 ×42.5	— —	川晒程度の白色度, 虫害多し, 薄葉である。
41	文禄 4 年 (1595)	30 ×45	16 15	剛度の大きい紙, 白色, 虫害あり。
42	慶長15年 (1610)	27 ×45	16 13.5	薄手の楮紙である, 白色なるもやや黄変す, 虫害ほとんどなし, ただ小円孔の虫害が少しある, 簀目, 糸目あるも良紙である。
43	慶長20年 (1615)	32 ×44	26 22	厚手, 耳付き 1 枚の漉上げの大きさである, 繊維束少しあり, 虫害中位, 横しわがある, 当時のいわゆる檀紙である, 白色の精巧紙であるがやや黄変している。この大きさが当時の 1 枚ずきの一種で, 元来の 28×40 以外に大判紙が生まれたのである。
44	寛永 3 年 (1626)	— —	— —	紙質優良, 薄葉, 虫害多し, やや褐色に変色している, 簀目, 目立つ, 繊維束なし, この年代の代表品の一つであろう, 今日以上の精巧品。
45	寛永 3 年 (1626)	— —	— —	紙質優良, 虫害極めて少なく, ただ小円孔の虫害が少しある, 繊維束なく叩解が適当である。
46	寛永年間 (1624~1643)	27.6×40.2	— —	寛永年間万江和尚が三玄院を建ったときの, 間切り図であって楮紙川晒程度の白色紙, 薄葉である, 虫害が少しある, 簀目, 糸目が目立つ。
47	正保 3 年 (1646)	34 ×43.5	24 23	厚手の楮紙, 檀紙, 白色なるもやや黄変す, 糸目あり, 一面に小じわがある, 虫害少しあり, 剛度小, 叩解適度。記さいの文字も丁寧である, この書類の発行者は, 奉行宗左納所佐 三とある。薄手の楮紙, 虫害小, 淡褐色になっている, 繊維束のない精巧紙, 簀目, 糸目, 目立たず, 剛度中位, 叩解適度。
49	寛文元年 (1661)	29 ×04	12	薄手楮紙はかは上と同じ。
50	寛文 9 年 (1669)	31 ×45	23 18	この大きさのものが横に 2 枚張り合わせてある, 厚手, 繊維束多く, 厚薄の差が大きい。
51	享保 2 年 (1717)	31 ×35	13 12	薄手楮紙で, 精巧な紙である。

番号	年 代	大 き さ (cm)		厚 さ (mm/100)		考 案
		タテ	ヨコ	最厚	最薄	
52	享保13年(1729)	32	×49	18	15	中葉の楮紙, 剛度大, 白色なるもやや褐色をおんでい る, 虫害多く, 繊維束あり, 簀目, 糸目, 目立つ。 横は, はしが切りすてであるも, 縦は仕上げしてない, 耳付きのままである。この2枚から, このころの 漉上げ1枚の大きさは横 45~49cm 位であるが, 縦は 32cm であったことがわかる。精巧紙とはいえない。
53	享保13年(1729)	32	×45	—	—	
54	寛保2年(1742)	29	×40	12	10	薄葉紙, 虫害多し, 白色なるもやや黄変す, 良質の楮 紙, 厚薄の差少し。
55	寛保3年(1743)	28	×42.5	15	13.5	薄葉紙, 白色, 虫害多し, 良質の楮紙。
56	元文3年(1738)	32	×37.5	17	14	虫害中位, 円形の小穴が少しある, 繊維束のない良い 楮紙。
57	明和8年(1771)	30	×47	—	—	厚手の楮紙, 虫害はない。
58	天明8年(1788)	30	×39(図)	—	—	本堂の図面である, この大きさの紙が4枚張り合わせ て, これに本堂の間切り図が書いてある。 図面に付属して覚書きした書類がある, この大きさの 紙1枚に書いてある。ともに楮紙で, 未晒, 虫害はない。
		24	×32.8			

この書類はほとんど全部が農民が大徳寺から土地を借用している。その借用証文である。

表は58種の古文書用紙を年代順に並べ, その考察結果を記したものであって, これらは, 番号28の雁皮紙を除いて, すべて楮紙である。

(1) 紙の大きさ この時代を通じて, 漉紙は, 簀漉1枚ずきであったと思われる。それは, 耳付き, すなわち漉き上げたままで仕上げ工程を経ないで使用しているものを見受けるのであるが, これによると, その当時の1枚の漉き上げ時の大きさがわかるのである。一般に, 使用に先だって, 耳を切りおとして, 一定の大きさとする, いわゆる仕上げ工程を行なうので本当の漉き上げの大きさは耳付きのままでないといわれない場合が多い。

この時代の製紙の大きさは, 大体縦の長さ(簀の竹と直角の方向, 簀を編んだ糸と平行の方向)の方が横の長さよりも短い。そして大体縦は30cm 位, 横は40cm 位のものが多いが, そういった規格については, 初期においては, 余り注意が払われていなかったことも推察される。また仕上げ寸法によっても, めいめい, まちまちである。

ところが弘治から永禄, 天正にかけては, 28cm×40cm すなわち縦28cm 横40cm という規格が大部多くなってくる。それが慶長年間になると32cm×44cm という大型のものが加わってきている。もっとも以前にも28cm×40cm よりもやや大きいものもないではなかったが, 劃然として大型規格判が一般に使用されてきたのは, 慶長の時代からではあるまいか。

この28cm×40cm の大きさは, 現在の美濃書院大であって, 障子紙または記録用紙として用いられてい

るものの大きさ 28.2cm×40cm や土佐書院の大きさ 28.2×40cm にほぼ等しい。

また大判の大きさは, 宇和仙貨紙の大きさ, 32cm×43.3 や宇陀紙 32cm×47cm にほぼ等しい。この宇和仙貨紙は, 天正年間宇和島において, 漉きはじめた。その地の特産品であった。江戸時代には帳簿用紙として使用された¹⁾。この記録からみても, この大判は, 天正時代の作品であって, 江戸時代すなわち慶長時代になって, その用途も拡まって行ったのであろうことがうかがわれる。

三玄院に保蔵されている古文書用紙もこれらの産品であろうか, またはこの類似品を紙屋院などによって漉き出し, 一般に使用したものであるかもしれない。そしてその大きさは, 後世にいう書院紙大のものが主なものであった。

(2) 紙の厚さ この時代の紙の厚さには, 厚葉, 中葉, 薄葉の3種のあったことがうかがわれる。厚葉は25~35mm/100 位, 中葉は15~20mm/100 位, 薄葉は8~12mm/100 位である。中葉と厚葉とがもっとも多く使用されている。厚葉は, 極めて強い紙で, 今日 of “ハトメ紙” に匹敵する。厚葉紙になると一般に剛度が大きくなり勝ちであること, 紙面に繊維束ができて, 今日の雲龍紙のようなものになる場合が多い。しかし厚いために, 簀の目や糸目はほとんど目立たない。不純物も多いので黄褐色に変色しているものが多い。薄葉紙になると紗漉は別として, 一般に簀の目, 糸目がはっきりと目立ってくる。また白色度は漉紙後の自然酸化によって割りに白色度を高度に保っている。

中葉になると、厚薄中間の性質をそなえている。質の目はほとんど目立たないが、糸目だけが目立つ。いづれにしても、今日の技術に比べると、ある一部を除いては拙劣であった。厚薄の差も大きかったり、繊維束が紙面上に残ったりする点は、技術の拙劣であったことを示す適例である。

繊維束が多く紙面に表われてくるのは、繊維の叩解作業すなわち“きぬた”が不十分であったり、煮沸が不足勝ちであったことを示すものである。

虫害の多いのも紙質の低下に基因する。

(3) 色 度 一般に手漉紙で、この時代のものは、未晒のものだから漉紙の当時においては、かなり着色していたものと思われるが、今日になっては、自然の酸化によって、いくらか白色度を増しているものもある。それがさらに、酸化などがすすんでくると、黄色、褐色に変化してゆく²⁾。その変化の初期にあると思われるものが多い。

また保存方法によって変色は異なってくるのである。三玄院保蔵古文書のごとく、紙包みとし、さらにこれを木箱に入れて、一室の部屋におく場合は、かなり長年月に亘っても、変色度が使用を妨害するようなことはない。薄葉程白色度が高く、厚葉紙の方が変色度が大きい。

(4) 虫 害 虫害の多寡は、保存方法や製造過程における念入の度合などによるところが多い。上記のごとく保存されてきたのであるが、一様に虫害甚だしいことが一つの特長である。

虫害の形式をみると2種類ある。一つは紙の繊維束の間を喰って行くもので、次第に虫喰の孔が細長く大きくなって行く。今一つは直径2~3mmの大きさの円形に喰いぬいて行くもので連続して大きくなって行かないで、一定の小穴が独立的に無数にうがたれて行くのである。この小穴は一般に薄紙に多い。厚葉の剛度の大きい紙には、前者による形式のものが多い。

虫害は、精巧品にはすくない。中村氏²⁾は、近著“和紙雑考”に“世が乱れると、紙質が低下し、虫害が多くなる。戦国時代の古文書は、虫害殊のほか甚だし”とあるが、この時代のものもそうである。

(5) そのほか 官庁用紙すなわち奉行から発する文書用紙のごときは、一般町民の使用した用紙よりも高級紙である。丁寧に抄紙されてあることがわかる。

総 括

(1) 15~18世紀337年の長きに亘って漉紙され、京都大徳寺塔頭三玄院に保存されてある古文書用紙を試料として、その製紙における技術的変遷を考察してみた。

15世紀のはじめ、享徳、文正の時代には、その技術も拙劣であった。それから次第に技術の進歩があつて、相当な手漉紙として、実用されるにいたつたのは、天文の時代からではあるまいか。天文から弘治年間(1547~1557)にかけての10年間には、かなりよい紙がすかされている。殊に薄葉、中葉によいものが多い。厚葉紙は製紙が困難である。したがってよい製品がすくないのである。これが、続いて永禄、天正の初めになって益々よい紙がすかれるようになった。

なおそれ以後慶長年代から元文年代にかけては、世も益々平静に復し、紙も引き続きよいものがすかれた。

(2) 全時代を通じて叩解工程がもっとも拙劣であったようである。その適度を十分に把握していないように見える。それがために製品の剛度がまちまちであり、紙中に繊維束が残っている場合が多い。

(3) 厚薄の差が大きい場合が多い。とくに厚葉紙においてそうである。厚葉紙を一様の厚さにすることがむづかしい。

(4) 大きさの規格がある程度重要視されるにいたつたのも紙の技術の進歩した天文の初期頃からである。

この研究にいろいろの便宜を与えられた、三玄院住職藤井誠堂師に感謝する。

(この一部は昭和37年8月12日 日化会中国四国大会で講演した)

文 献

- 1) 成田潔英 紙業提要(著)66, 69(昭和28)
- 2) 中村徳次郎 和紙雑考(著)90(1960)

古い和紙に関する考察

第1報 序説 紙バ技協誌 17,3,23(38年3月)

第2報 敦煌出土写経などの用紙について

紙バ技協誌 17,3,28(38年3月)

第3報 桜蘭出土文書とその用紙について

百万塔 第17号(38年9月)

(東京都北区堀船1の1 製紙博物館発行)